

# “時代の要請に対応した新しいカリキュラム開発への取り組み”

## — 摂食機能と食品・栄養学 —

歯学部 山田好秋・歯学部 五十嵐敦子・歯学部 野村修一

### Development of a New Curriculum in Dental School for Social Demands

Yoshiaki YAMADA, Atsuko IGARASHI and Shuichi NOMURA (School of Dentistry)

We as the committee members in Dental School have been concerned to develop a new curriculum for social demands. Recently, people involved in the care of the aged and the patient suffered from the cerebral disorder, are pointing out the following matter: they desire to eat food through their mouth even it is risky and dentists are desired to join in the care. Thereafter, we have constructed a new curriculum with a series of lectures of whereby we can deal with their demands. We took survey from students, and got evaluations to the new trial after lectures. There found were more responses than expectations, in that young people are seeking something new and are sensitive to social problems. We thus inform of the content here.

**Key words:** New curriculum, Social demands, Eat food through their mouth

#### はじめに

急速な高齢化を迎え社会の歯科に対する要求も大きく変貌してきている。その中であって、時代に即したカリキュラムの見直しが早急の課題となった。そのため歯学部では6年一貫教育へ移行する時期にできた空き時間を利用し、新しいカリキュラムの開発をめざした特別授業枠を設けることにした。歯学部カリキュラム委員会では検討した結果、寝たきり老人や、病院の患者さんが、「自分の口から食べ物を食べたい」という切実な要求が聞かれる現状を見て、平成9年度の2年、3年生向けに「摂食機能と食品・栄養学」の開講を決定した。講師の先生は一線で活躍されている専門家をお招きすることとし、講義の目的を明示し統一のとれた講義となるよう、シラバスの作成をお願いした。そして、平成9年9月より11月にかけて、7名の非常勤講師の先生方に講義をしていただき、また、学生からはアンケートの形で新しい試みに対する評価を受けることにした。ここでは講義の目的、シラバス、そして学生のアンケート結果をもとに、新しいカリキュラム開

発への取り組みを紹介してみたい。新しい試みに対する学生の反応を紹介するにあたり、なるべく学生の生の声を記載する形で報告することとした。

#### 講義の概要

対象学年：2年生、3年生（各60名）

開講時間：各講義とも3時限および4時限

（12：50～2：20、2：35～4：05、90分授業2コマ）

講義の目的：高齢者や脳血管障害の後遺症として摂食機能の低下がみられるが、従来の治療が延命を中心として行われてきたため、摂食機能の回復に社会の目は向かなかつた。最近、医療の現場だけでなく、養護老人ホームなどの福祉施設から、介護やリハビリに関連して摂食機能の問題が取りあげられるようになり、顎・口腔器官の基質的な障害、脳に関連した機能的問題、摂食時の体位をどうすべきか、摂食機能障害に適した食品の形状・物性、高齢者や摂食機能障害者の食品の安全性をどのように確保すべきかなど、多くの問

題点が指摘されている。歯学部では従来より基礎・臨床を通して各講座で摂食機能、栄養学の講義を行ってきたが、いわゆる摂食機能障害を対象とした総合的な講義は行われていなかった。そこで新たに「摂食機能と食品・栄養学」を開講し、臨床の場で摂食機能障害に取り組んでおられる諸先生方ならびに食品・栄養学の専門家をお招きし、時代の要請に沿った歯学教育を実施する。

開講日程：

第1回：平成9年9月10日 オリエンテーション  
花田晃治（本学部 教授）

この講義の開設目的、講師の紹介と講義概要の説明

第2回：9月17日 在宅医療の現状と課題

柴田浩美（グー・ハウス 代表）

高齢社会となった現在、医療と介護に大きな問題が山積みされています。在宅におけるケアの課題は、特に摂食介護と口腔ケアの専門性が強く望まれています。それらの対応は在宅医療におけるマネジメントの必要性と口腔リハビリテーションを理解する関わりが重要になってきています。在宅ケアのニーズにあった専門的役割を認識し、そのアプローチを紹介します。

第3回：9月24日 食品材料学

石原和夫（県立女子短大食物栄養専攻科 教授）

食品の中で、一種類で栄養的に完全であるというものはなく、種々の食品を組み合わせることで初めて生命が維持され、健康な生活を送ることができる。一方、私たちの食事は栄養的に満足出来ていればそれでよいというものではなく、おいしく食べることが大切である。そのためには、各食品の特徴を十分理解し、栄養面や嗜好性、経済性、そして、安全性などを考慮して食品を選択できるようになることが必要である。

第4回：10月15日 脳血管障害のリハビリテーション：

嚥下障害を中心として

才藤栄一（藤田保健衛生大学医学部リハビリテー

ション医学教室 教授）

リハビリテーション医学の見地から、脳血管障害患者の治療を概観し、摂食機能障害に対する治療管理についても述べたい。脳血管障害は、片麻痺を代表とする身体・精神機能の障害を残す重要な疾患である。しかし、リハビリテーション医療によって多くの問題を解決できる疾患でもある。障害という概念、運動学習、など主要な対処法を紹介する。また、摂食とは、食べることであり、人間の生活に欠くことのできない日常行為である。摂食嚥下障害の病態生理、診断法、管理法などをリハビリテーション医学的観点から紹介する。

第5回：10月22日 臨床栄養学

岩原由美子（信楽園病院栄養係 係長）

「口から食べる」ことは、単に栄養補給のみではなく、生きる楽しみであり、さらに人間らしく生きることでもある。しかし、病院や特別養護老人ホーム、訪問看護などでは、経口摂取に障害のある人が増えており、嚥下機能に応じた食事形態の配慮が欠かせない。また、嚥下障害の治療とともに、医師を中心に、看護婦、言語訓練し、理学療法士、栄養士などによるチーム医療への関心も高まっている。そこで、当院における摂食機能障害者の問題点と対策について紹介する。

第6回：10月29日 食品衛生学

宮西邦夫（県立女子短大食物栄養専攻科 教授）

科学技術の進歩が食品の生産・製造・保存等に多大な改革をもたらした半面、使用される食品添加物、農薬、抗菌・抗生物質、器具、容器の材質等、諸化学物質の安全性が問われている。化学物質のみならず細菌についても、流通機構、消費生活の変革により事故発生時の被害が広域化、多大化する危険性が危惧されている。以上の状況から、今回は病原性大腸菌による死亡事故を事例として示しながら、食品保健の立場から食品の安全性について概説したい。

第7回：11月12日 歯科医療における摂食機能障害

向井美恵（昭和大学歯学部口腔衛生学教室 教授）

今後の歯科医療を考える時、従来の歯と口腔の組織や形態の疾病のみならず、摂食・嚥下などの口でなされる機能疾病に対する医療対応も不可欠である。しかしながら、これらに対応するためには他の医療分野との連携が必須となる。本講義では乳幼児期の発達から高齢期の機能減退までを概説し、歯科医療における摂食機能障害への対応はいかにあるべきかについて解説を行う。

#### 第8回：11月19日 ボランティア活動への誘い

坂井 典（新潟市社会福祉協議会

ボランティアセンター 所長）

1. 今なぜボランティア？
2. ボランティアとは
3. ノーマライゼーションの視点から
  - ・障害者の話を聞こう
  - ・障害体験をしてみよう ～アイマスク、車椅子～
4. わが町のボランティア事情
5. 素敵な学生ボランティアさん紹介
6. 21世紀に向けての夢（学生さんからお聞きする）

#### 第9回：11月26日

カリキュラム委員と学生による総括、試験

#### 成績評価の方法

各テーマに対するレポートにより評価する。

#### 学生の反応

講義についてのレポートによる考察、及び感想。

#### 講義についてのレポートのまとめ

##### \* 第2回 在宅医療の現状と課題

- ・歯科医があまっている現在、こういう摂食に関する分野にも、歯科医が積極的に介入すべきと思った。
- ・これからの歯科医療は、即ち治療だけでなく、患者さんが、人間らしく食べることが出来るようになることを、考えていくと、訪問歯科

医療が重要な意味を持つようになる。訪問歯科医療とは、歯科医が患者さんの生活の中に入ってこそ意義をなす。人が生きていく上で、口からものを食べるということは大変重要な意味をもつ。ものを食べた時おいしいと感じられてこそ、人は生きようとする意志をもつものだ。これからの歯科医療は患者さんの人間性を自覚しながら食の確保を通じて、生活に役だっていかなければならない。

- ・介護の意識が変わりました。当たり前のことに眼がむいていなかったように思います。すべての面倒をみるのが、介護でなく、手をださない事も介護だったのです。患者さんが出来ることを見極めることが大切なのです。

“食べる”ことが生きていく上での基本なのだと思いました。これからの歯科医療は歯を治療するだけでなく、食べる意志を持たせたり、食べる手助けをすることこそが、求められていることだと思いました。

- ・全体的に科学的ではないという印象を受けた。（科学的であることが、一概に良いとはいえないだろうが）。例えば、障害児の頬筋を軽く刺激すると、どうして咀嚼できるようになるか、理解できなかった。

- ・歯科学の勉強だけでは、不十分だと思った。例えば、寝たきりの方の心理状態、家族の思い、それをとりまく社会背景など様々な視点から見た医療をおこなわねばならない時期に来ていると思う。なによりも行動力をもたなければ、取り残されてしまうという印象を持った。待っているだけの医者は、社会のニーズにそぐわない。積極的に病む人々のところに駆けつけ、心身ともに、なおしてあげる積極的な医療が要求されているのではないか？

- ・口腔リハビリテーションという言葉をはじめて耳にした。歯科におけるリハビリテーションという分野にもっと、関心が寄せられる時代がくると思いました。
- ・医療に携わるものが今しなければならぬのは、個人にあった治療である。人それぞれかかえて

いる問題が違うので、マニュアルどろりにいかない。

### 第3回 食品材料学

- 歯科の分野は、口腔内の治療だけと思いがちで、人間が生きていく上で、最も、重要なことは、食べるということだと解った。ゆえに、歯科医も食品栄養学にも精通することが、必要とわかった。
- 日本本来の米、豆類、野菜、魚介類を中心にした理想の食事をとるようにこころがけたいと思った。大豆からできる味噌がコレステロール制御や、抗腫瘍性、抗変異性などがあると解った。
- 歯科との接点は少なかったが、味覚という快楽を得られるよう、食品材料学の基礎的な知識がなければと思った。
- 遺伝子組み替え作物は長い摂取後、どうなるか、解らないまま、受動的に買わされるのはどうかと思った。それゆえ、慎重に取り組んでもらいたいと思った。
- 食品は人間にとって欠かせないものであり、人間の発育や、健康を左右するものであるので、顎口腔を扱う歯科医としてこれから、関心をもって医療にいかしたい。
- 加圧食品が加熱食品より、すぐれているということが理解できた。(栄養、風味、鮮度)

### 第4回 脳血管障害のリハビリテーション：嚥下障害を中心として一

- 嚥下障害のリハビリテーションについて十分な知識を持つ医師、看護婦は少なく、歯科医が果たす役割は大きい。
- 嚥下障害食は進歩しているようだが、一流のシェフをやってもどんどんおいしいものを開発して、患者さんの食べる意志を高めるようにしたほうが良い。
- いままでの、講義で、医療の質は医療器械の進歩にもかかっているが、患者の病状や障害を総合的に把握でき、可能なかぎり能力回復に努める医師の熱意がそれを向上させるのだと思った。

- 歯科がどのように、嚥下にかかわっていけば良いのか解らなかったが、この講義で、誤嚥しても、必ず、肺炎になるわけではなく、口腔内の衛生管理がしっかりしていけば良いとのことで、この点でかかわる事が出来ると感じた。
- 心臓のリズム機能の低下にペースメーカーがあるように、咽頭の反射不全には嚥下ペースメーカーを使用するという時代がくるのではないのでしょうか？大変興味深いものがあります。
- 歯科医師過剰時代、高齢社会である、現在、立派な歯科医として生き残るために単に歯の治療だけでなく、摂食嚥下障害などの症状に対応でき、口腔内を総合的に診断、治療、管理することが望まれる。
- 嚥下障害は外からみえない、だから対応しづらい。口から食物を摂取することは人の欲求の一番基本的なものといえる。
- 年齢をかさねるごとに、幸せをあまり感じられなくなるということは、あまりにも、寂しく、悲しいことである。自分もそうはなりたくない。きっと、患者さんも同じことを思っていると思うので、少しでもそういった患者さんを治療出来るよう知識を身につけていきたい。きちんとした治療をし、障害を楽にし、食事や日常生活を楽しく送れるようにするのも、歯科医師の役目だと思う。
- 嚥下障害の人にかかわるといことは、食べることだけの全般だけでなく、排便に至るまでの生活の問題全般にかかわるといことを忘れてはいけないと思った。
- いままでの特別講義を聞いて歯科医、歯学部というものに対するイメージが自分の心のなかで変わってきた。もっと、様々な講義を聞いて将来のことを考えてみたいと思った。

### 第5回 臨床栄養学

- 投薬や手術による、治療も大切だと思いますが、楽しく食べるということが患者さんに生きる気力を持たせて、治療の向かう第一歩であると思われるので栄養における研究は非常に有意義な

ものであると思った。

- これからの歯科医は患者の健康管理にも、目を向ける必要があると気がついた。嚥下は歯科の領域でもあるのでもっと、積極的に研究を重ねるべき分野だと思う。
- 嚥下障害時の食品のポイントは、ゼラチンが最適な食べ物である。しかし、食べられない患者でも自分の好物は食べられると聞き、驚いた。
- 障害を持った人に食べる楽しみをもう一度、取り戻せることが、これからの歯科医に重要だと痛感した。
- 嚥下障害の講演を聞いて、同じことをしているのにも関わらず、歯科衛生士、栄養士、歯科医とずいぶん患者を見る角度が違っているとわかった。どの部分も欠かせないので、連携がとても大切だと再認識した。チームを組み、嚥下障害を持った患者さんに接してゆく必要性を感じた。
- 歯学部とか、歯科医という言葉が悪いのではないかと思った。というのはこの言葉から、従来の歯を削り、充填物をつめ、義歯をつくるということが思い浮かびしかも、それだけという感じがいなめない。歯学部変革が叫ばれているなか、思い切って名称を“歯科口腔学部”とか、“口腔歯学部”というふうに、変えるとよい。それによって、口腔全体を扱う意識が生まれてくる。

#### 第6回 食品衛生学

- 歯科医として菌のもっとも多い、口腔を扱うので、細菌についての知識、対策は充分に知っておかなければいけないと痛感した。
- O-157は、先進国で多いのは、免疫力が落ちているせいである。抗生物質もいちごっことで、問題はなかなか解決しない。
- 食品衛生管理もともかく、バランスのとれた食事をとって、免疫力をつけること。
- 忘れきっている日頃の注意を怠らず、ひどすぎる潔癖症を緩和させないと、また細菌の逆襲にあってしまう。今の日本では病原菌が比較的に少ないため、研究施設や研究者が減少しつつあつ

たため新しい菌への対策が気にかかる。

- 食物を管理するものとして、HACCPの7原則（宇宙食の7原則）がある。この原則をクリアする企業はほとんどないから、予防は大切である。  
\*HA（危害分析）、CCP（重要管理点）
- 感染経路で人体にはいる口を歯科医になる我々が、正しい知識を持たなければならないと思った。
- 人間が細菌から保護されすぎて、細菌にたいする、免疫力が低下しており、人間がどんどん弱くなってきている。食品衛生も大切だが、両刃の剣だと思う。

#### 第7回 歯科医療における摂食機能障害

- 今回の講義は難しかった。患者さんの求める治療と歯科医の行なう治療の間に大きなギャップがあることを最も思った。在宅医療の講義の時にも同じ事を感じていた。
- 現在、離乳食の開始を歯科医に指導してもらうなどということは少ないが、「摂食」のことであるから、これからは多くなるのではないか。
- 摂食・嚥下障害が小児から成人、高齢者へと広い世代にわたって様々な症状があり、それに対応した治療法も多様であることを認識するとともに、歯科医療との関わりを深さを改めて知った。
- 症例ビデオに感動した。患者さん本人だけでなく、家族も治療効果に喜んでいる様子が溢れていた。自分は将来、高齢者の多い無歯科医村の診療所、あるいは機能障害の分野の歯科医療に従事したい。
- 今回の講義は最も臨床的で、摂食嚥下障害のリハビリにおいて歯科医に求められている像というものを理解できた。
- 以前に看護体験があるが、今回の一連の講義を聴きある程度の知識が備わったと思うので、学生の中に再び高齢者などの食事介助の現場を見学したいと思った。
- 食べる意欲と安全に食べる動きを引き出すとと

もに、家族が一緒になって食事ができることが大切だと思った。機能だけでなく、心のリハビリも必要だと思う。

- 今回で7回の講義が終了したが、明らかに歯科に対するイメージが変わってきた。
- 摂食障害も歯科医が携わっていくべき重大な疾患であると思った。
- 咀嚼運動は唇、頬、歯、舌など全てによってなされ、歯だけを取り扱ってはいけないと繰り返し強調していたのが印象に残った。

#### 第8回 ボランティア活動への誘い

- “何かお手伝いできること、ありませんか？”といえるようになりたい。相手の喜ぶこと探しがボランティアだが、その条件は自分自身の発信であり、無償であり、相手がそれによって喜ぶことである。一方、自分の名前を名乗り出る事はしなければならない。
- ボランティア活動に参加することだけが、ボランティアではなく、たとえば、障害をもっている人達に、その障害を過剰に意識させないような接し方をすることでも良いのではないかと思った。
- 今回の講義は現代社会でのボランティアの多様性と、社会を動かす可能性について全く言及されていない。あまりにも偏ったボランティアへの誘いであった。もっと、マクロな視点を持った講師を招いてもらいたい。ボランティアは対症療法だけでは、物事の根本解決にはならないと思う。このため、ボランティアでも、ミクロとマクロの眼が必要であると思った。
- いままでは、摂食障害の話がほとんどであったが、今回視覚、聴覚障害の人の治療する機会も

あると気がついた。

- 障害者が生きやすい社会になってほしい。そして、体の良い人の体が悪くなったとき、人生をあきらめない社会になってほしいと思った。心があつくなった90分でした。
- 私は手話をやっているのに、聾重複障害児と遊ぶボランティアに参加しているが今現在やっている以外にも、時間があればボランティアをやって広い視野で人々を見ていけるようになりたい。
- 民間レベルでの支援ばかりではなく、是非とも充実させなければならないのが、行政の支援である。ハンデを持った人の人生を支える義務があると思うし、人権の補償もしなければならない。これは行政の責任においてなすべきだと思った。同時に身体面だけでなく、精神面での相談や悩みを聞き入れる機関の充実も早急におこなうべきだと思った。

#### まとめ

今回、歯学部特別枠“摂食機能と食品、栄養学”を終了してみて、その結果思いがけない多数の反応があり、その反応は“何を考えてるかわからない”といわれる最近の学生に対する我々の予想をはるかに超えたものであった。

その中では、従来とは違う歯学部に対する認識であり、明らかにこれからの歯学部へのモチベーションがつけられたと思われる。そのうえ、ボランティア活動への反応が予想外に高く、我々にうれしい悲鳴をあげさせるものだった。

その結果、授業としては、満足すべきものだったと思われ、今後、高齢社会を迎えるに当たり、新しい歯学部のあり方を示す一助になったものと確信している。